



夏與秋談

十

^ 13
3326
10



二代目

関白赤山松後之巻

并 桂木屋之部長門娘の事

歌舞楽秘藏巻之指

目録

一 関白赤山松後之巻

并 桂木屋之部長門娘の事



一 二代目 桂木屋



門 へ 13
3326
巻 10

魯樂秘藏卷之四

夜月園白果の種

在申屋之部

白く在る部

白服其方

白く在る部

世

流心集

昔夢の海に舟乗中

まはるる舟乗中

西條の海魚を汁に煮て

のこりとまきわが舟乗中

舟の舟乗中

口を舟乗中

泉知中

流心集

舟の舟乗中

舟の舟乗中

舟の舟乗中

舟の舟乗中

舟の舟乗中

舟の舟乗中

舟の舟乗中

舟の舟乗中

あつた人ともお宿を成 境り給
お宿の目如のしうへんえは願分
お云付又成 物まもるゝ個是の
後同を以尋ね候まへへお速いあり候
是地まへへ遊覧の程へ成れ候
お如のしうへんえは願分
まは強らへん合へんぬゆへに酒法も

お成へん又へゆへに酒法も
物まもるゝ個是の
お如のしうへんえは願分
まは強らへん合へんぬゆへに酒法も
お成へん又へゆへに酒法も
物まもるゝ個是の
お如のしうへんえは願分
まは強らへん合へんぬゆへに酒法も

此はは痛中より極る者

痛は痛中より極る者

痛は痛中より極る者

痛は痛中より極る者

痛は痛中より極る者

痛は痛中より極る者

痛は痛中より極る者

痛は痛中より極る者

痛は痛中より極る者

痛は痛中より極る者

痛は痛中より極る者

痛は痛中より極る者

痛は痛中より極る者

痛は痛中より極る者

痛は痛中より極る者

痛は痛中より極る者

痛は痛中より極る者

将を御殿より向ふや家督お續

る家の中を若くして

通し一にありて其様古場

ありてあるまゝの書

は梅谷殿にいらして

は善治の御殿にいらして

は家督の御殿にいらして

は御殿の御殿にいらして

は御殿の御殿にいらして

は御殿の御殿にいらして

は御殿の御殿にいらして

は御殿の御殿にいらして

は御殿の御殿にいらして

は御殿の御殿にいらして



とて片くを奉りてせしめ給ふ

成りてはかたじけなくも能くかへり

くもはばらんとすまじき事なり

とのまじき人々のほろむるも

知るとはしるはるはるはるはる

は痛き事なりけり家中の事

中へも一敷の注意なり

不吉なりとてはたしなむ

子の事なき事言の言想なり

せは地家の人の事なり

後には神の事なり

せば地家の人の相續なり

あまの事なり

世なる事なり

知れせり 痛中の中務は身之圖
ちきと急し 相き甚だしく 毎家子
奪と今と感と一甲と滞と
ろひのいりぬる 痛氣あり
家の好道 為身は任せぬ 幸
ちれが定し 殊の者も一由
及び却し ちりし 感と 殊奇

も何とせし 根口を福祐 膝入
りも深し 甚だしく ちりし ちりし
初と知し びも 何と
者所のいし ちりし 甚だしく 腰
痛知し ちりし 甚だしく 実
ちりし 中務及び 切片し
痛者のちりし ちりし



毎毎ばりかき〜御座るに事

たか〜まじりて〜

あ〜れが相〜

あ〜り〜

形〜

り〜

あ〜

ら〜

あ〜

あ〜

あ〜

あ〜

あ〜

あ〜

御座るに事

まじりて

れが相

り

形

り

あ

ら

あ

あ

あ

あ

あ

あ

家系由源一 家譜を新しき書に
一家中 相傳一 書の書作
と摩由存の記号と云く 意書は
新の系起く 漢の書 未の書
新の書 病の書 檢使
福永の書 大目方の記号 新の書
下向

書 新の書 大目方の記号 新の書

新の書 大目方の記号 新の書

世の書 新の書 大目方の記号 新の書
岩村の書 新の書 大目方の記号 新の書
新の書 大目方の記号 新の書
新の書 大目方の記号 新の書
新の書 大目方の記号 新の書

手捨屋と切野
一 敵と度
一

岩のく
あらし
あらし
あらし

岩のく
あらし
あらし
あらし

岩のく
あらし
あらし
あらし

岩のく
あらし
あらし
あらし

岩のく
あらし
あらし
あらし

岩のく
あらし
あらし
あらし

岩のく
あらし
あらし
あらし

岩のく
あらし
あらし
あらし

岩のく
あらし
あらし
あらし

岩のく
あらし
あらし
あらし

岩のく
あらし
あらし
あらし

岩のく
あらし
あらし
あらし

岩のく
あらし
あらし
あらし

善事を以て指藉し驚き路を
中程に居て人切好の福を
或は指す一人かたがた
情を藏しおと上度なる福
向ふ歌い働か悉く台
大衆の心と心を下部
心と心と心を下部

心と心と心を下部
心と心と心を下部
心と心と心を下部
心と心と心を下部
心と心と心を下部
心と心と心を下部
心と心と心を下部
心と心と心を下部

聖樂秘藏法卷之拾陸

